

日記

一九三三年（昭和八年）

宮本百合子

青空文庫

八月十一日

国府津の海岸。夕方の六時すぎから七時、七時半、段々あたりが暗くなる裡に上げ潮の白い波頭が遠く二宮の海岸の方にまでよせては引く景色が実に美しい。

渚に立って、足の先を波に洗わせながら自分は、思いに沈んでいた。

愛するものの逞しい腕につらまってこの波に浮び、全身を力づよい潮にまかせて洗われたら、どんなに幸福であろうか、と。――

そして、幸福というものの感覚を鋭く鋭く感じた。「幸福」は

観念ではない。よくひとは、何々を考えれば幸福であるというような事を云うがそれは内容のないオームの表現だ。幸福は感覚だ。しかも或人に対して或特定の条件によってだけ感じられる感覚だ。景色が美しければ美しいほど心なぐさまぬ自分をはつきり感じた。その心は巖のようであつた。ことごとくに存在をはつきりするばかり。

○同じとき

四辺がすっかり暗くなつた。夜ぶりの灯が水平線に規則正しい間かくを置いてキラキラ輝き出した。

それは陸から見ると美しい。しかし、その沖の灯の下にある飢えを考えると、私共はその美しさを云々することに気恥しさを感じ

じる。社会は変らねばならぬ。すべての自然の美を、美として甦らせ得る社会が来なければならない。

そう思つて、我々はいかに多くの歎びと美を失っているかと思つて暗い波の上を見て居たら一艘小舟がいつの間にかすぐ前の波うち際へ薄黒くやつて来ている。

夕闇の海面でぼんやり影がひろがつて、高く低くゆれてもまれている舟とその上に櫓をあやつっている漁師の姿が、実際より大きく、馬にでもものつているように見え、気味わるかった。

やがて大きい波にのつてスーと砂地へのりあげて来た。漁師はすばやく船からとび降り、砂原を駆け馴れている独特の足つきで速く砂の上へ網の綱をひっぱって行つた。

八月十三日

夕飯をたべに行こうという。父、母、明治やの上の中央亭。

○そこへ大□さんが夫婦、娘で来る。父・母急にあわて、うやうやしく立ってあいさつをする。レスパクトを払う。

自分いやな心持。

かえりに、先へ行く、わざわざ名刺を書いてボーイにわたす、お先に失礼と。

小市民的卑屈さ。

父のしやれ、自動車の前へのもつて、

○アイスクリームをおそくたべるとレートクリームだよ

○夜仕事をしていると、やって来る、

「出しっぱなしじゃないか？」と便所へ行つて見る。

「タンクが一時間で又くみ上げているんだ」

「女中さん達が体を洗っているからでしょう」

「可哀そうに水で洗つてるのか。——おつかさんはそういうことはどうもしわくて困る。そとへゆく、遊ぶ金がある、何かなくなる、二十円か三十円でフロ桶なんかあるんだからつくつてやらなくちやいけない」

○何故息子は家から去るか。

部屋がない。

二日留守してかえつて来て見るとテーブルはわきへよせ、その

上に本をつみ上げすっかり片してしまつてある。

息子いやな心持。口に云えず。親は親のことばかり考えて生活していると感じる。

○自分はもう何年か日記をつけなかった。日記をつけることは不便と思つたのだが又つきたい。

小市民的生活の些事。

それに対するケン悪。それを克服したつもりのN、せいぞうのインテリゲンツィアの屈伏。やはり屈伏である。小市民生活の驚くべき無内容。そのために、ことごとく過程を問題としてさわぐ。離れに來ると、温室の前にシャツだけの俊造がいて犬が黒と茶、あべこべにくつつき合つて舌を出して立っている。俊造はその前

にしがんで見ていたところをスと立った。それが体の動かし具合でよくわかった。

（八月頃犬は恋愛するのか。）

陽気な若者はいろんなことを話して、人生の迷路に立っているものを益 困惑に陥いれて去った。

性格と性格との絡り合い。



おふくろは、柔い泥の中の石のようであつた。柔かい泥にさわっているときそれはまるで柔いが一旦かたいものに石にさわると、人はもうその動かないこと、打ちやぶりがたいこと、母の本質はそこに凝固していることを感じるのであつた。

○女中部屋

一人がこしかけ、おどろくような髪をとかしている。

一人が座ってぬいもの

冷蔵へ水をとりにゆくとねている母が、

「だれだいそこを歩いて行くのは」

と怒鳴った。自分トクに「お気の毒だったね」と云ったら水道のところで

「いいえもう……」

「馴れて居りますかい」

と大笑いをし、こつちへ来て、又女中部屋へゆくと、トク戸のところに水のビンをもって立って何か云っていたのが、私の来るの

を見て一寸片手で押えるような形をした。自分そのまま下駄をはいて出て来たがその手つきがわすられず。――

mのこと

「対官憲の問題があるの」

「――それもあるの、

この間もってかれた時にね――……それ程のことじゃないけれど……。」

一旦言葉をきり

「死んでもかまわないって云うのが本当だということは分つてい
るけれどね……あたし私はそれはこまるんです」

○体がうすくなっちゃった。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十四卷」新日本出版社

1980（昭和55）年7月20日初版

1986（昭和61）年3月20日第4刷

入力：柴田卓治

校正：青空文庫（校正支援）

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテニアの皆さんです。

日記

一九三三年（昭和八年）

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 宮本百合子

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>